
私と人魚と王子様

琴南 雫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私と人魚と王子様

【Nコード】

N4902L

【作者名】

琴南 雫

【あらすじ】

海で渦に巻き込まれたと思って気がついたら海に浮かんでいた私で、なんで足が尾びれに！？異世界トリップ？人魚？王子？何これ！！
海に逃げようとする私と阻止しようとする王子とのドタバタラブコメディ…の予定です。

第一章 異世界で人魚？

昔、絵本の人魚姫を読んで大泣きした。

絵本の中の人魚姫はとてもきれいで清らかだった。

私だったらこんな風にはなれないと思いつながら彼女をかわいそうだと思った。

でも、自分が全く泳げないことを知ると、今度は彼女を羨ましく思うようになった。

「きれいだな〜」

目の前に広がる青い空、青い海。

そしてその海にいる私、七瀬亜衣17歳。

泳げるはずのない私がまだ生きていられる理由は、これだ。

「うるさく」

下半身が魚になっている。そう、足が尾びれになっている。赤いうろこが眩しいぜ！とか言っている場合ではない。なんでこんなことになってるんだか。

どうしてこんなことになったのかももう一度考えてみる。

そう、今日は確か美穂にナンパのために海につれていかれて……。

私の愛しの命綱である浮輪で美穂を無視して海に浮かんでいたら謎の渦に巻き込まれて……。

溺れたら人魚になるってあり得るのかな？

「いや、ありえないだろ！！」

足をバタバタと動かそうとしたら尾びれがパシャパシャと水面を揺らした。

泳げない私は昔無理やりチャレンジさせられても浮けるようにすんならなかつたのに……何だか複雑な気分。

うくん、せつかくだし泳ぐか。

潜って海を堪能する。青というよりエメラルドグリーンのような綺麗な海に見たこともない綺麗な魚たち。

「うわー。きれーい！！水の中なのに目を開けてられる！溺れない！！」

泳ぐのは楽しい、海の世界は壮大だ、と嫌がる私を説得した友だちや先生の言葉を思い出す。

あのときは写真で見れば十分と思ってたけど撤回。ものすごくきれい。

感動している泳ぎまわっていると何かに引っかかった。

いたっ！！なに！？

そう思った瞬間私は何かに強く引っ張られた。

第一章 捕獲（前書き）

もう少し字数を増やしたいのですが…。
短くてすみません。

第一章 捕獲

なんだか窮屈!!なにごと!!?

バタバタと暴れてみたけど、解放されない。何よこの網は!!ん?
網?あれ?あれ ?

「おい!!人魚だぜ!!こりやもうけもんだ!!」
「ついてるぜ。早く戻ろうぜ!!」

ぼろいボートに蔽つい二人の男。マンガでよく描かれる定番な。え?海賊かな?驚いて口をパクパクしている間に、樽に詰め込まれた。そついえば、小さい頃バケツにすっぽりと収まるの好きだったな。あの頃と同じ感覚だ。つて和んでる場合じゃない!!

「ちょっと、海に帰る!!」

「金づるを逃がすわけねえだろ」

「というよりなんで私人魚なのよ!!」

「はあ?おかしなやつだな。頭ん中大丈夫か?」

「私は至って正常よ!!」

「うるせえやつだな。少し大人しくしてろ」

男その一は私の頭を押さえてその二が樽のふたをしめた。

「開ける !!」

一体私が何をしたっていうのよ!!あれか!!昨日弟の大事にとつておいたプリンを勝手に食べたからか!?いや、あれはプリンが悪いんだよ、うん。

色々考えている間に船は陸についていたらしく、樽は激しく揺れる。

「ちょっと、レディはもっと丁寧に扱いなさい!!」

「れでい?なんだそれは。それはお前の名前か?」

「あんたバカ?それとも私のLとRの発音がなっていないってこと言いたいのか?」

発音の違いがわからなくてテストのリスニングは全部間違えて、先生に特訓されるものの最後はため息の後にかわいそうな人を見る目で「もういいです」と言われたあの瞬間の怒りと悲しみを忘れたとは言わせない!!

思い出したら頭にきて暴れたら樽の中に入っている水が少しあふれた。

「はあん?もう一度言ってみろ!!このアホ人魚!!」

「おいヴィロ、相手にすんな。さっさと行くぞ」

「お、おう」

そのあとは、何を言っても反応が返って来なくて、樽の中がうす暗いせいか眠くなって寝てしまった。

「しかし、この人魚本当に売れるのかねえ?」

「まあ、物好きな貴族なんていくらでもいるさ。最悪殺して肉屋にでも買い取ってもらおう」

樽の外でそんな物騒な会話が話されていたことは知らずに。

第一章 捕獲（後書き）

男二人の一人の名前が出てきましたが、主人公の中では永遠に男その一とその二でどっちかとも認識しないでしょう（笑）

第一章 会話不能（前書き）

遅くなりましてすみません。

第一章 会話不能

「ほう、これは珍しい……」

「いや、災いの象徴では……」

周りがなんだかうるさい。なんでゆっくり寝させてくれないの？ それになんだか狭いし、布団は？

「ん……」

「っ！！起きたぞ！！」

「目も黒いとは……」

何だか騒がしい。

目を開けてみるとそこには広い広間だった。左右に段差の低い階段みたいになっていてそこにたくさんの人が座ってる。

そして真正面には同じような階段の先に立派な椅子に座っているおじさんがいる。左右にはインテリっぽい人と鎧を着たでも、全部すこしばやけて見えるのはなぜ？ん？壁？

「え？なにこれ！？」

私は今金魚鉢の大きいバージョンに入れられている。もちろん水も溢れんばかりに入ってる。

この扱いはなに？それにみんな周りの人の服、ひらひらしてて昔らぐがきした中世の貴族っぽいような格好な気が……。

「ほう、目が覚めたか」

立派な椅子に座ったおじさんが話し出した途端、水打ったように広

間が静かになった。

「あなた誰？えらい人？ここどこ？」

「お前は本当に人魚族のものか？」

「すべて無視ですかー？人魚族つてなに！？他に人魚がいたりするの！？」

「お主、レディという名だそうだな」

「いや、ちがうし！！人の話を聞け！！」

全く噛み合っていない会話が続き、もはや会話の成立は不可能だと判断してそうそうにあきらめた。

何やらまだ一人で会話を続けようとしているが、全て無視。仕返しだ、コノヤロ！！

それにしてもここ、日本じゃないっばいよね？夢とか？でもさつきふつうに寝て起きたけど。異世界トリップってやつかな？それにしてもなんで人魚になる必要はないでしょ……。

「では、レディは王族の管理下とおくものとする」

「ん？」

どうやら話はまとまったらしい。何話してたんだろ？考えこむと周りのこと忘れちゃうくせ直した方がいいかな。

しかし、あんな会話無視の上司を持つと部下がづらいだろうな……。

「では、私の宮に……」

「お待ちください。陛下」

いつの間にか金魚鉢のそばに人がいた。

長い金髪の人。上から見下ろしてるから顔が見えない。またわけわかんない人が増えた。

「僕がレディを管理しますよ」

金髪は顔を見上げ、私の目を見てそう言った。

……もう展開についていけないのですが。誰か解説者を私に紹介してください。

第一章 会話不能（後書き）

王様は人の話は聞かない人ですが、宰相とはきちんと会話のキャッチボールができるみたいです。

第一章 尽きぬ誤解(前書き)

今回は少し長めです。

第一章 尽きぬ誤解

広間はずいぶんと騒然としたけど、会話不能なおじさんが一言「許可する」といっただけでまた静かになった。

それで、今豪華な部屋の真ん中に私はいます。

もちろん、金魚鉢の中ですけどね？しかも机の上っていう微妙なところに。

しかも、謎の金髪は私を見て「これでいいか」と満足したように笑うと話しかけようとした私を無視してそのまま出て行ってしまった。

放置ですか。さっきのおじさんといい金髪といいこの人は会話という言葉の意味を知ってるか問いただしたい。

「それに、私の名前レディじゃないんだけどな……」

広い部屋に一人ひとり言。果たして本名を名乗れる日は来るのだろうか。これは、あれか。時々いる、自分のことを名前という人の真似をすればいいのか。

「亜衣、いい加減にキレそう」

……、やめよう。

色々考えていると、扉が開いて女の人が二人入ってきた。

一人は、茶髪で肩につかない程度に長いけどウェーブがかかっている。目はきれいな青色。うーん、瑠璃色ともいえるかな？顔が小さくてかわいい。

もう一人は、長い青紫の真っ直ぐできれいな髪。絶対さらさらヘアだ！それに顔もきれいで大人な雰囲気。お姉さんって呼んでみたい。

二人ともメイド服を着ている。といつてもコスプレで見るとはつじやない。

深い緑色の足元まであるワンピースみたい。袖がハフスリーブなのはメイド服だからかな？

でもストンと落ちるのではなく、スカートのすそは広がっている。Aラインっていえばあたってるはず。

エプロンは、フリルがない割烹着に近いデザイン。膝あたりまでしかなく、腰の位置にはポケットは左右に一つずつ。

走りにくそうだけど、こういうデザインのほうが私は好きだな。

「レディ様、この度お世話をさせていただくことになりました、シリアとツイネです。よろしくお願い致します」

「あ、はい。こちらこそよろしくです。ちなみに私の名前は七瀬亜衣です。レディじゃないので、そこんとこ重点的によろしくお願いします」

「ナナセ様ですか。素敵な名前ですね」

「いや、七瀬は苗字。名前は亜衣」

ふう。ようやく名前が言えたよ。

それにしてもかわいい人がシリアさんで、キレイなお姉さんがツイネさん。お世話ってなんか私ってすごく偉い人みたい。あのおじさんみたいなのはごめんだけど。

「アイ様。私たちは、遠からずとも人魚族と縁のあるものです。ここで人魚族が暮らすのには何かと不都合が多いと思いますが、精一杯尽くさせていただきます」

うーん、人魚族って今の私のことだよな？ いったいどうしてこうなったのかとつても不思議でツッコミを入れたいところだけど、ここは我慢して少し知識を増やそうかな。

「あの、私人魚族とかこの世界の常識とかよくわからないんですけどよかったですら教えてくれませんか」

「え」

二人は驚いたようで目を見開いてお互い顔を見合わせた。

そして、ツイネさんが恐る恐るといった感じで聞いてきた。

「もしかして、アイ様は生まれたばかりなのですか？」

「え？」

今度は私が固まった。普通に17歳ですけど、生まれたてに見えるってこと？

私はため息をついた。

名前の次は年齢ですか。

第一章 尽きぬ誤解（後書き）

メイドさんが二人出てきました。洋服の説明はこれが限界です。難
しかった……。

主人公の受難は続きます。そして王子は退場早やすぎ（笑）

第一章 発覚（前書き）

お待たせしました。

たくさんのご訪問ありがとうございます！！

第一章 発覚

「私は十七歳です。ちゃんと生まれてから十七年間生きてます」
「じゅ、じゅうなな……」

二人は茫然としている。え？何そのリアクション。
童顔じゃなくてどちらかというと、見た目落ち着いているからって
年上に思われるんだけどなあ。

それに、どうやったら生まれただけに見えるんだか。赤ちゃんじやないよ。

「失礼ですが、アイ様の尾びれの色は生まれつきでございますか？」

「いや、この尾びれとはここ数時間の付き合いです」

「……それはどういった意味でございますか？」

「いや、そのまんまの意味です。この世界に来ちゃったのも数時間前だし」

どう考えたってここが地球はずがない。

地球では、人魚のことを人魚族というところはないと思うし、普通に人魚はいるよねという態度をみんながとってるなんておかしい。言葉が通じるのに所々通じてないし。……レディとか。

「少し席を外させていただきます」

二人は礼をとると、早足で部屋を出て行った。

もしかして、問題発言だったかな？頭のおかしい人間だと思われたらどうしよう。あ、人魚か。

さっきの広間でも誰かが言ってたけど、この尾びれの色はおかしいのかな。赤い尾びれ、中々キレイ。鯛を思い出すなあ。

そつだ、頭のおかしい人だと思われたら、記憶喪失つてことにしようかな。自分の名前と年齢しか覚えてませんつて。

元の世界に帰る方法も見つけないといけないよねえ。すぐに帰つたら逆ナンの続きかもしれないから夏休みが終わるくらいに帰りたい。それまでの拠点はどうしようかな。ここ偉い人がたくさんいるし、情報収集には持つてこいかもしいけど、小説だところという場所つてドロドロとしてるんだよね、色々。

「さて、どうしようかな」

人魚になつたからには海を思う存分泳ぎたい、と考えているとまた金髪男が戻つてきた。

あ、シルアさんとツイネさんもいる。

「レデイ、十七歳つて本当？」

あれ？さつきと口調が違くない？さつきは堅いイメージだったけど、今は柔らかい。気のせい？

「どうやつたら生まれたての赤ちゃんに見えるんですか。それに私の名前は七瀬亜衣です。アイ・ナナセ」

「アイ・ナナセつていうんだ。あ、そういうえは俺の名前言ってなかつたね。俺はルカ・エーオス・ティオン。ルカつて呼んでいいからね」

「ふーん、長い名前。昔の貴族とかみたい」

「んー、一応この国の第二王子つてやつだしね」

「そうなんだ。…つては？王子？うつそだー！！王子つて感じじゃない！！」

「本当なんだけどな」

ルカは王子と言ってるけど、話し方はゆっくりだし雰囲気もほのほのの。
王子ってもっとキリッとしていて意思が強い白馬が似合うかっこいいイメージなのに、あってるのはかっこいいというか、綺麗な顔だけ。白馬に乗ったら落馬しそう……。

「アイ様。ルカ様は正真正銘のこのティオン国の第二王子でございます」

シルアさんが、真面目な顔をして言ってツイネさんは頷いている。
本当に王子？イメージが……。

第一章 発覚（後書き）

王子再登場！！そして名前も出てきました。
じっくりくるようなこないような名前です。
しかし、主人公にすごいイメージを持たれてますな……。

第一章 王子と茶髪男

「俺は王位継承する気はないからね。兄上が継ぐ気満々なんだ」

そんな穏やか顔をしていうものなのか！？

ふつう、王になるかならないかじゃ全然権力とか違うし、王になりたくて戦争や陰謀がよく起きるものなのに。

異世界トリップで王や貴族がいるとなれば、そういうものが起きるのは定番なのにな。

「えーと、ルカは王様になりたくないの？」

「うん。俺には向いてないし、適材適所ってやつだよ」

うまいこというな、この王子。

「ルカ殿下、まだそのようなことを仰っているのですか」

あれ？知らない声。

「あ、ニルカ。どうしたの？」

「ルカ殿下が戻ってこないからお迎えにあがりました」

気がつけば知らない茶髪男が。

ノックとかちゃんとして入ったのか知らないけど、私を一切視野に入れないようにしている気がする。

「まだそんなに時間が経ってないじゃないか」

「それは気の所為でございます」

えーと、少しとげとげしているよ？チクチクと痛そう。

「まだアイと話しがしたいんだ。あ。そういえばまだ肝心なこと聞くの忘れてた」

「……ルカ殿下」

うん、なんていうか茶髪男よ。お疲れ。

ルカの相手するのって大変そう。

ある意味究極のマイペース男だよな。

ため息をつく、茶髪男がこつちを見てきて目があつた。

おお、金、いや黄色の瞳だ！！猫みたい。

「あなた誰？」

「大体ルカ殿下、いつも言わせて頂いてますが何かをする時も時間というものを忘れずに効率よく物事を進めなくてはなりません。それに……」

「おーい」

え、この人もあのおじさんみたいに会話不能なわけ！？

茶髪男はルカに説教を始めるし、ルカはルカでそうだよな、と頷いている。

なんというかこの国色々大丈夫だろうか……。

「わかったよ。それにアイがさつきから退屈そうにしてるよ」

いや、考えごとをしているだけですから。

しかも何その構ってほしかったんだよね目線は！！

シルアさんもツイネさんもそこ顔かない！！

「はあ……。で、あんた誰？」

「俺？さつきも言ったけど、俺はルカ……」
「ルカじゃなくてその茶髪男！！」

ピシツという効果音がつく勢いで指差す。

ここが、水の中で実際そんな効果音がしないなんて知ったことか！！
ルカが、違ったの？視線を送ってきててもそれも知らないふり！！

「……申し遅れました。わたくしは、ドイツ家次男のニルカ・ドイツツと申します」

「はあ、どうもご丁寧」

綺麗なお辞儀をしてニルカとやらは私を見た。

じろじろと観察するように見てくるので、私も観察し返す。

髪の毛は、ツイネさんみたいにさらさらじゃなくて堅そう。

しかも癖っ毛なのかあちこちにはねていてワイルドな雰囲気。

「アイ、何やってるの？」

「観察し返してるの」

「なんですか、それは」

「あ、目を逸らした。私の勝ち！！」

「……仰ってる意味がわかりません」

ニルカは、ため息をついてシルアに目配せをする。

「アイ様、お腹は空いていらっしやいませんか？宜しければ何かをご用意いたします」

言われて考えてみれば、今日の朝は（美穂の張りきった朝五時のモーニングゴールのせいで）早かったし、お昼何も食べてない。

ぐう、とお腹が鳴ってシルアさんは、では少々お待ち下さいませと

言って出て行ってしまった。

異世界の食べ物っておいしいのかな？うーん、楽しみ。

「そうそう、アイ」

私があればこれとおいしいご飯を想像していると、ルカが何かを思い出したみたいで手をポンと叩いた。

「アイって本当に人魚族なの？」

途端、部屋はシンと静まり返った気がした。

金魚鉢の水が私が動く揺れてちゃぶちゃぶと音を立て、その音がやけに大きく聞こえる。

みんなの視線が集中する中、私はどう答えていいか考える。

私は、異質な存在だろう。

そもそもここの常識なんて知らないし、さっきシルアさんとツイネさんと深く考えずに話したら驚かれたんだから私の当たり前は通じない。

でも嘘をつき続けるのってそのうちボロが出た時に辛いんだよね。色々と考えが頭の中をぐるぐる回って頭が痛くなってきた。

そもそも私は深く考えるのは嫌い。

でも、ルカは処刑とかなさそうだけど、絶対に安全安心とまでとは言えないし。

よし、こうしよう。

「さあ、知らない」

惚けてみる。

まずは様子見ってやつですね！

第一章 王子と茶髪男（後書き）

遅くなりました。

次の話は世界の説明とかになりそうです。

第一章 人魚族と常識

「……」
「……」

しばらくルカと私は、無言のまま見つめあった。

いや、別に恋人同士のようなピンクオーラを出しているわけではないですよ？

「アイ。アイは自分の尾びれの色について何か思うことはない？」

「ん、赤いよね」

無難に濁して答えたつもりが、ルカは満足したのかにへらっと笑った。

こっちまで気が緩んじゃうよ。

「アイは生まれたばかりなんだよ。人魚族は、水の精霊の加護が宿るせいで青い髪、瞳、尾びれと青尽くしなんだよ」

「……えーと」

もしかしなくても発言を間違えたかも。

これは、記憶喪失設定を発動するべきか。

でもその前に本物(?)の人魚に会ってみたい。青尽くしとかすくきれいなんだろうな。

ルカは、笑顔のまま話を続ける。

「アイは、赤い尾びれに、黒い髪に瞳。赤色は、火の精霊の加護色だから一緒に出ることはないんだ。青系統の色を全く持たない人魚族なんて聞いたこともないし」

「……へえ」

まずい、まずいぞ!!これは。

私が、視線を逸らしてそっぽを向くと、ルカが話を続けてた。

「それに最近では滅多に見れない人魚族が近海で網に引つ掛かるなんていうのも珍しいというかおかしいんだよね」

「……そうですか」

もう白状したほうがいいのかもしれない。

緊迫した雰囲気がこの部屋を支配している。

さらにルカの方を見ないように首をこれでもかと捻子っていると、ルカがクスッと笑った。

「まあ、いいや。アイがこの国に災いをもたらすんだったら保護対象ではなくなるけど、今のところそうは見えないし」

「もちろん!!平和って大事だよね!!」

「ルカ殿下!!こんな子どもでも知っていることを知らないのに、17歳というなんて怪しいです!!きちんと調べるのも管理者の仕事の1つです!!」

和やかになったと思ったとたん、ニルカが抗議し始めた。

もう、空気読めないやつだな。それにしても、管理ってことはルカに監視されながらこの金魚鉢が私の住むことになるのかな?

金魚鉢という狭いところにずっといるのはとてもいや。どうせなら広いお風呂とかがいいな。ルカに言えばそのくらい叶えてくれそうでも、ニルカもいるし危険な発言は自分の命を縮めそうだし。

「人魚族は精霊と人間の間の子であり、とても神聖なもの。アイ様には神聖という言葉は当てはまりません」

「ケンカ売ってんの？」

「いえいえ、そんなことはありませんよ」

ニルカって腹黒？いや、まんま黒い！！

腹が立ってきた！！言いたいことは言うべきだ！！

私は、ルカをきつと睨むようにして見る。

「ルカ、私の住まいがこの金魚鉢だなんて私いや」

「じゃあ、俺の風呂にする？でも深さが足りないかも」

「それでも結構！！」

ルカはほののんと言った。

ルカって王子だし、当然お風呂は大きいよね？

これは期待できる。

「ルカ殿下。そのような発言は軽々しく言ってはなりません。他のものへどう認識されるか、この王宮での権力図への影響を考えてくださいと何度も……」

また説教を始めるニルカ。

将来禿げるフラグが立ってる。こういう人はストレスが溜まりやすそうだし。

ルカとニルカのやり取りを見ているとノックする音が。はい、と返事をするツイネさんとシルアさんが入ってきた。

「失礼致します。アイ様にお菓子をお持ちしました」

「わーい」

2人の手にはティーポットとカップ、それにお菓子。

クッキーだ！！よかった、楽しみだったけど、意味不明の物体とか

人魚だからとか言って海藻のみとかチラツと思ってたんだ。

私は、足をバタつかせてぷはっ和金魚鉢から顔を出して淵に腕をのせる。

でも、クツキーがのせてあるお皿に精一杯手を伸ばしても届かない。これはツイネさんたちの協力が必要だ。

「……………アイ様」

「？」

ツイネさんたちがまた驚いて固まった。

え？まずいことした？ただ顔を金魚鉢から出てクツキーを取ろうとしただけだよ？

まさかマナーがなっていない、食い意地が張って退いてるとか？

「アイ、もしかして精霊の力を使えないの？」

ルカは、固まらずにあのにへら顔で考えてなかったことを聞いてきた。

精霊？それはおとぎ話とかに出てくるあれですよ？精霊の力を使うとかそんなことできるはずない。

でも、この反応からするとどうやら人魚族は精霊の力を使えるらしい。

そういえば、さっきニルカが精霊と人間の間の子って言ってたけど、それと関係してるのかな。

「え〜と〜只今ケンカ中……………」

またしても沈黙。

もう色々と苦しいです。

最初から記憶喪失ってことにしておけばよかった。

今からでも間に合いますかね？

第一章 人魚族と常識（後書き）

思ったよりも話しが進みませんでした……。

ニルカは、思ったよりも姑みたいに色々うるさそつなキャラになってしまいました（笑）

第一章 驚きと反省

気まずい沈黙の中、私は赤い尾びれを見ながらこれがちゃんと二本足だったらダッシュでこの場から逃げてたな、と思った。

ああ。足よ、二本足になれ！！

心の中でそう願ってみると、青いふわふわとした光が現れて尾びれの周りをくるくる回り始める。

え？これ何ですか？また驚かれるようなことだったら勘弁してください。

「ふふ、ケンカなんてしてないわよね？」

「っ！！」

ひ、光に笑われた！？今確かにこの光、笑って喋りましたよね！？
光の声は、男とも女とも言えないような……そう、子どもがはしゃぐ声に似ている。

それにケンカしてないってまさか…精霊ってやつですか？いや、まさかね。

「ねえ、異世界から来た人魚さん。人間の足にしてあげようか？」

光は、私の顔前で楽しそうに揺れながら問いかける。

本当に？おとぎ話展開だと畏。声を失って最後は泡。

でも、私王子に恋してないし、というカルカは考えられないし、この光は魔女に見えないんだけどな。

「魔女？君の世界には魔女がいるの？」

「え？こつちにはいないの？」

異世界って言ったら、魔法に魔女でしょ！！これは、詳しくない私でも常識のごとく知ってます。

「魔女じゃないよ。じゃ、少しの時間だけ楽しんでね」

光は、くすくすと笑いながらスツと消えた。

えーとーこれはどういうこと？もう、わけわかんない。ああ、考えすぎて頭が痛くなってきた。ついでに、足も疲れてきた。

ん？足？そつえば、さつきから私バタ足してるような気が……。

「ええ！？」

足を見るとなんと二本足に！！まさかさっきの光のおかげ！？

これは、なんとしてでも陸に上がらねば！！

急いで上へもがいて縁に捕まる。

よし、脱出だ！！

「あ」

勢いよく出ようとしたら、金魚鉢が傾いた。

そつえば、ここ机の上。

縁から体を乗り出した体勢のまま床が近づいてきて、思わず目をつぶった。

「あぶなかつたね」

でも、衝撃はなく、一拍遅れてバシャーンと水が飛び散る音が盛大にした。

恐る恐る目を開けると、目の前には綺麗な顔があつて、目が合った。

わー、こんな綺麗な顔を近くで見るの初めて！。

「ルカ殿下、大丈夫ですか？」

現実逃避しようとした私をニルカが呼び戻した。

そう、今私はルカの上においてさらに抱きしめられています。

というかごめんなさい。びっくりが大きすぎて人がいるのをすっかり忘れてました。

「る、るか。はなして」

舌が回らない。顔が熱い。

こんな状況生まれて初めてで免疫がない。

「アイ、大丈夫？」

「はなしてくれば」

ルカが、よかつたといつて離れた瞬間飛び跳ねるように立ち上がって扉へダツシュ。走れるって素晴らしい！！

「アイ！！」

「アイ様！！」

後ろから呼ばれる声が出たけど、気にしてられない。

とりあえず今は恥ずかしくて死にそうです。どこか押入れに避難させてください。

これまた綺麗で埃一つ落ちていないような廊下を全力疾走。

全身びしょ濡れで走るたびに水滴が飛ぶわ髪が顔に着くわで大変だけど、さっきのに比べたらミジンコもの。

無我夢中で走ってたなら、何やら人の声が前から響いてくる。

まずい。これじゃ押入れを見つける前に金魚鉢に戻されちゃう!!

はあはあと息切れしながら左右を見ると、右には扉、左には窓。

ここは一階らしく窓の外には庭が広がっている。

うーん、押入れを探すなら右だけど、人がいそいだしな。

これは運命の選択つてやつだ、と考えてそんな大げさなものじゃないと思いなおす。

「お前らはこちらに來い!!」

さっきよりも声が近くなってる!!

私はとっさに選択していた。

「あ

右、即ち扉を。

扉の中には男と女の人。

男の人と目が合う。

「し、しつれいしました」

二人は、その、き、きすの最中でした。

……もう押入れと言わずにどこかに埋められたい。

回れ右をして窓に突進してそのまま庭へと出る。

こんなのってないでしょ!?

走って林の中に入ってしゃがむ。

膝を抱えて体育座り。
押入れじゃないけど、ここなら反省会、いや頭の整理ができそう。
そういえば、格好も水着の上にTシャツを被ってるだけだし。
色々と恥だよ。ふつつ、海でもないのにこんな格好でいる人なんて
いないだろうし。

整理（というほど情報がない）すると、ここはティオン国という国
で人魚族は珍しい存在らしい。

人魚族は、人間と精霊の間の子であり水の精霊の加護が宿るから青
尽くし。

水の精霊の加護ってことは水の精霊との間の子なのかな？

人魚族は精霊の力を使えるらしい。

私は、赤の帯尾びれで普通の人魚族と違うから管理されることにな
ってその管理者がルカ。

ルカはこの国の第二王子でお兄さんがいて王様になる気はないマイ
ペース人間。

味方とは言い切れないけど、私を殺すとかひどいことはしないと
思う。

そういえば、ツイネさんとシルアさんは人魚族と縁のあるものだっ
て言ってたけど、どういう意味だろう。

で、私はどうして人魚族でどうやってたら元の世界に帰れるんだ
ろう。

海から来たんなら海へ帰るべし。

ここを脱出して海に行かなくっちゃ。人魚族に会ってみたいし。

でもその前にこの格好をどうにかしないと。

ばれないように低姿勢で林を庭に沿って進むと洗濯物が干してあっ
た。

よし、まずはあそこで服を調達しよっ！

第一章 驚きと反省（後書き）

亜衣は突っ込みはいつも遅れます。（というより気づくのが遅い）
亜衣視点だと一話前の突っ込みとか普通に入りますので読み手のみなさんにはもどかしいかもしれませんが、付き合ってやってください。

第一章 妖精と知識（前書き）

いつも読んでくださってありがとうございますー！ー！

第一章 妖精と知識

シーツやら服やらが風吹かれてパタパタ揺れている。

この世界でも物干し竿を使うのは一緒みたいでその光景は爽やか。周りを見ても人はいない様子。

よし、どうにかしてあそこの服をどれか手に入れないと。

茂みから出て、しゃがんだ姿勢のまま慎重に進む。

警戒してるけど、人の話し声もしないし見張ってる人はいないのかな？

しゃがんでるのがつらくなってきたところで目的地に到着。

ふう、さてと。

何かいい服はないかと見ていると、白いワンピースを発見。

袖なしなあ。これ着て麦わら帽子をかぶったら避暑地のお嬢様完成だね！

他にいいのは見当たらなかったからそれを拝借してまた茂みに戻る。Tシャツを脱いでワンピースを着る。

う、これまた乾いてなくて微妙に湿ってる……。

ま、まあ勝手に借りてるんだし文句言わない！

これで準備万端！と立ちあがって塀の方へと歩く。

塀のどこかに出入り口はあるはずだし。

歩いてると井戸があった。喉乾いたし水を飲みたいな。

井戸から水を汲むって一度やってみたかったんだよね！！

「お、おもしろい」

思ったより重いんだね！！
引くだけで水分補給が必要だよ。

「やった」

やっと水を手に入れた！！と思つて桶を見て固まる。

「また会つたね。異世界かた来た人魚さん」

桶の中に手のひらサイズの人形がいる。
ウェーブのかかった水色の髪綺麗ですね。

「あら、もしかして姿見えないの？」

「あ、あのどちらさまで？」

「わかつてるはずでしょ？」

透明の羽根が背中に生えてる。

妖精。

「当たり前。でもその前に水飲んだら？」

そつだ、喉乾いてたんだつた。

精霊はふわふわと飛んで桶から出る。
掬つて飲んだ水は冷たくておいしい。

「ふう。で、妖精さんはどうしたの？」

「君が混乱してるだろうから来たの」

いや、妖精さんの登場でさらに混乱している気が……。

「ここは君のいた世界ではないわ。」

この世界に名前はないわ、あるのは大陸一つと周辺にある小さな島々。

ここはその大陸、シオン大陸の南にあるティオン国」

「異世界だよねえ」

妖精は口元に手をあててくすくすと笑う。

小さいのに優雅な仕草だな。

「人魚族というのは水の精霊と人間との間の子だよ
もつとも最近は純粹たる血筋のものは少数だけどね。
もしかしたら君は人魚族のものに呼ばれたのかもね」

「え、わからないの？」

「彼らに関わる精霊は口が堅いんだ。」

彼らは居場所を隠してひっそり暮らしているから、いるところを知らないし何をしているかわからない」

同じ精霊なのに不思議だな。

みんなの知識を共有しているとかないんだ。

「我ら精霊は火、水、土、風がいるんだ。」

間の子は人魚族以外にエルフ族、ドワーフ族、龍人族がいるよ。

この四種族がそれぞれの精霊との間の子。

今は間の子としてあるものは少なく血筋でかろうじて色が出るものが多い」

ふむふむ。

どうやらいろんな種族がいるらしい。

人魚族はその一つ。

引きこもり気味で人前に姿を表わさないからどこにいるのか不明。

「君はこの世界で生まれたわけではなく体はそのまま精霊の加護を受けたから色が出なかつたんだね。

体の相性としては火の精霊が強かつたみたい。

だから尾びれが赤いんだ」

「えと、それは人魚族以外だったかもしれないってこと？」

「それは違うよ。人に呼ばれたなら人のまま。色が出るだけ。

少なくとも水の精霊の加護を受けしものが呼んだからそうだったの」

「うーん、泳ぐことができるし運がよかつたと言えばよかつたのかな」

とっても微妙なところだけど、エルフとかドワーフになるよりは夢があるよね！

魔法使つてみたいけどな！。

この世界には魔法あるのかな。

「で、そろそろ時間切れだよ」

「え」

瞬間、体が傾いた。

「ほらね」

バランスを崩して地面に倒れた。
立とうとしたら足が一緒に動く。

こゝこの感覚は……！！

「やっぱり……」

また尾びれになってる。

人間になるのは少しだけってこと？

何この時間制限。

「妖精さん。もう一回人間にしてよ」

「体への負担が大きいから数日に一回がいいよ。

無理にすると死んじゃうかも」

「え、いきなりヘヴィーなんですけど。そういつことさらって言わないですよ」

見た目はかわいいのにさらっとすごいこと言ったよ。

そうだ、妖精なら元の世界に戻る方法知ってるかも。

「知らないよ。呼んだものなら知ってるだろうけど」

「と、いうことは人魚族に会わなくちゃいけないの？」

「可能性としてはそれが高いね。でも、断定はできない。たまたまこの世界に呼ばれた時に加護を宿した、ということもあるかもしれないしね」

「ええ。他にこの世界に来た人とかいないの？」

「はるか昔に一人、来た。でも今はいない」

仲間、いないのか。

人魚族を探して私を呼んだ人のところに連れて行ってもらう。
それが目標。

(海に行かなくちゃ)

ついでに思う存分泳ぎたい。

元の世界にもどったらまた泳げないんだろうし。

「じゃあね」

考えていたら妖精はまたしても突然消えた。

え、放置ですか。

まさかの放置ですか。

なんて無責任な妖精だ!!

どうするのよ、私!!

尾びれが乾いてきたのか、息苦しくなってきた。

口で息してるのに、どうして?!

ダメ……いしきが……。

第一章 妖精と知識（後書き）

やっと世界設定を大まかに出すことができました。
この世界の人間も妖精もマイペースですね（笑）

第一章 長かった一日

「ん……」

目が覚めるとグレーの瞳と目があった。

「あ、起きた？」

「……」

ほんわかと笑う顔を見て、私も笑い返す。
「って近い!!」

「ルカ、なんでガラス越しとはいえこんなに近いの？」

「アイが干からびて心配だったから」

鼻がくっ付きそうなくらい近いんですけど。

ガラスがなかったら悲鳴ものだよ。

周りを見るとまた金魚鉢の中にいることに気付く。

お風呂は？

「お風呂じゃないの？」

「今深くしているところだからもう少し我慢してね」

「ほうほう」

素晴らしい住みかになってるといいな。

人魚族を探すためにここを拠点にする気はないけど、寝る場所って大切だよね!!

「アイは人魚族なんだから気をつけなくちゃ」

「はあ」

陸に上がった魚状態になってたのかな。
そもそもなんで私はこの部屋を飛び出したんだっけ？

「ああー！！」

「どうしたの？」

お、思い出した！！

いや、忘れていたかった！！

さつき、ル、ルカに事故とはいえだ、抱きしめられたんだった。
顔が熱くなってきた。

「アイ、風邪？顔が赤いよ」

「気のせい。いや、気のせいじゃなくても突っ込まないで」

「でも風邪だったら大変だよ」

「いや、そこは察してよ！！」

鉢の底で膝を抱えて顔を隠す。

この王子は！！

「失礼します」

「ニルカ、アイがおかしいんだ」

え、ニルカ？

面倒くさいのが来た。

「傍迷惑な人魚がどうかしましたか？」

「顔が赤いんだ」

ちよつと待て。それ私のこと？
突っ込みたいところだけど、今日は疲れました。

「……放っておけば大丈夫でしょう。
それより夕食の準備が整いました。
お部屋でお召し上がりしますか？」

「今日はアイと一緒に食べるからここへ運んでくれないかな」

ニルカは何かを言おうとして口を噤んだ。
はぁ、とため息をついて礼をとって部屋を出て行った。

「今って夜なの？」
「そうだよ。もう月が出てる」

窓を見てもカーテンがかかかっていて外が見えない。
カーテンも高そうなの使ってるなあ。
夜つてことは私何にも食べないまま……。
シヨ、シヨックー！！
気付いたらお腹がすいてきた。

ぐう、とお腹がなつてルカに笑われた。

「アイの夕食も用意してあるから」
「……ありがとう」

すぐ運ばれてきたこれまた豪華な食事をして満足満足。
どうやら精霊のおかげで食事はお皿ごと気泡に包まれてガラスを貫
通した。

なるほど、これは便利だな。さっきはこうしなかったから驚かれた
んだ。

「ねえルカ、私海に行きたい」
「それは無理だね」

食事中ルカに海に行きたいとお願いしても苦笑された。

これはやはり脱出するしかない。

でもこの金魚鉢は机の上にあるし、またひっくり返ったらどうぞ見つけてくださいと言ってるようなものだし。

よし、最初はお風呂に移動するまでここがどんなところか調査だ！！

「じゃあ、また明日」

「うん」

食事が終わるとルカは部屋を出て行った。

なんて濃厚な一日だったんだ。

今日一日を振りかえってみる。

……。

うん、今日みたいな日が続いたら私死んじゃう。

疲れた。もう寝よう。

でもこの鉢狭いから横になれないな。

ベッドより布団が大好きな私としては絨毯の上でも寝れそう。

勝手にここから出て寝っ転がったら干からびて死にそうだけど。

今日は我慢しよう。

目を閉じると眠くなってきた。

意識が途切れる寸前どこか遠くて水がピチヨン、ピチヨンと水面を叩く音が聞こえた気がした。

第一章 長かった一日（後書き）

トリップ一日目終了。

一日に十話かかるとは予想外でした。

一章はこれで終わりです。

間章 王様と手紙

異世界に来て三日目。
朝目が覚めて、シルアさんとツイネさんが食事を運んでくれて食べている時それは来た。

ルカが持ってきた一通の手紙。

「はい。これ父上から」

受け取って見てみると、最初に名前はアディオ・エル・ティオンと書いてあった。

「…………アディオス」

「ん？」

ついつい一字付け足しちゃったよ。
あの会話不能のおじさん、もとい王様か。
なんで王様から手紙？

中身を読んでみるとこう書いてあった。

私の名前は、アディオ・エル・ティオンと申す。
人魚族とは水の精霊と人間との間の子である。
今現在わが国には人魚族はいない。
縁があるものが少数いるだけだ。

……

…

と長々しく文が書いてあった。
何これ。

「あ」

字と睨めっこして気がついたけど、これ私が最初に会った時に聞いた質問に対する答えだ。

「父上は人見しりすることが多いから、日を改めて会話での返事を文にして渡してるんだ」

「何そのいらぬ設定！！聞いた時に答えてよ！！それにレスポンス遅いから！！」

「れすぽんす？昔からあだし、みんな知ってるよ？」

「いや、だからって初対面の人に自分の言いたいことしか言わないってありなの……？」

会話の返事が三日後ってどういうこと……。

王様って忙しそうだし、だから？

いやいや、それより王様の人見しりじゃ色々とまずいだろ。

「父上は歴代で一、二を争う外交上手だと言われているよ」

「それは……」

やりとりが手紙だからじゃないの？

言おうとして口にできなかった私は偉い。

この世界にテレビが存在していたらこの国は危ないって。

「ルカのお兄さんは人見しりなの？」

「いや、兄様は社交的な人だから違うね」

会ったことないけど、それなら安心かな。

それにしても、ルカはのほほんとしてるし、王様は人見しりりで会話の返事は数日後の手紙。

私、この国にいて大丈夫なのかな。

字が読めたという喜びと疑問よりも真剣に考え込んだ朝だった。

間章 王様と手紙（後書き）

更新が遅れてすみません。

サブタイトルを整理してみました。

次からが第二章です。

第二章 計画と妨害（前書き）

PVアクセス7万到達、お気に入り200件突破！！
ありがとうございます！！

第二章 計画と妨害

そろそろつとつま先立ちしてタイルの上を歩く。

「よし」

扉をほんの少し開けて隙間から顔を出して左右を確認。
第五回作戦決行！！

「アイ」

踏み出そうとした足が空中で止まる。

ギコギコと後ろを振り向くと、そこには金髪サラサラヘアが。

「ちょうどよかった。今休憩をもらったから一緒にお茶しない？」

「ルカ……」

なぜそこにいるんだ。

仕事はどうした。今はまだ昼前だよ。仕事をしろ、仕事。

「今日も人間になったアイにばったり会ったね。これってすごいよ」
「……」

あの、一言物申しあげてもいいですか？

「いい加減に気付けええええ！！どう考えてもおかしいでしょ！？何で毎度毎度タイミングよく現れるのよ！？あの腹黒に使われてることにどうして気付かないの！？」

この世界に来て、翌日から私は大人しく過ごした。ずっと金魚鉢の中にいるのはいやだとかルカに我がまま言って部屋の外に連れて行ってもらったりしてね。

……実際は金魚鉢をカートみたいなののにせてレッツゴーだったけど。

あと、何かと世話を焼いてくれるツイネさんやシルアさんに話を聞いたりした。

ツイネさんは、お祖母さんが人魚族と人間の子供で、シルアさんは曾祖父さんが人魚族だったらしい。

部屋に来るわけわからん人たちの相手もした。

でも暇なもの暇だし、元の世界にも帰りたいなあとか思ったりするんですよ！！

「そうなの？」

「そうなの！！気付かないってどういうこと！？っていうかよく今まで生きてこれたね、それを尊敬したいよ！！」

暴れるとそれに合わせて乾ききらなかった髪から水滴が飛び散る。ここでは床が濡れるからとか気にしなくていいのが救いだ。

海へ脱出しよう計画を立てようと思っただとところにお風呂にお引越す。

広いし、真ん中に布団があるの！！これは譲れなくてルカに力説して叶った。

尾びれは干からびないように水に浸かったままだから上半分しかないけどね。

大きな室内プールみたいなお風呂の上に孤島のごとくある台の上の布団。

……シユールってこういうことを言うのかもしれない。

「アイに尊敬してもらえるなんてうれしいなあ」

「気にするのはそこじゃないから!」

照れたように頭をかかない!!

ルカって本当に政務してんの?こんな上司だったら下で働く人は大変だよ。

脱出するためにはまず足を元に戻してもらわなければならない。それが必要で、そう頻繁にはできない。この年で早死に決定とか悲しすぎる。

ツイネさんとシルアさんがいなくなって、ルカや腹黒ニルカが忙しそうだからこちらに來なそうな時を狙っているのに、いつもルカは部屋に現われる。

すつごくすつごくいいタイミングで。

それは才能ですか、と問いかけたくなるくらい、いいタイミングで。

「失礼致します」

「……」

そしてここでメイド2人が戻ってくる。

ああ、今回も失敗か。

ルカだけならともかくこの2人を振りきるのは困難。

前に追いかけられた時すぐに追いついた。

しかも何が恐ろしいって涼しい顔ですごい速さで走ってくる。

あれは、本当に怖かった。うん。

「アイ、今日は何食べる?」

「……今日は前食べたあれをもう一度食べたい気分」

はあ、とついため息がでる。

今日は大人しくおいしいお菓子食べよう。

次こそは脱出して海へいくんだから!!

第二章 計画と妨害（後書き）

遅くなってしまうし申し訳ございませんでした。
ルカは相変わらず天然さんです。
読んで下さる皆様に心底感謝！

第二章 散歩と笑顔（前書き）

大変遅くなりました！！

第二章 散歩と笑顔

ルカが前で紅茶を飲んでいいる時、私はもんもんと次の計画について考えてた。

海…に行かなくちゃいけない気がする。

頼んでも叶えてくれる人もいないし。(ニルカは一言で撥ねつけてルカはそうなんだの一言。ニルカには水をひっかけてやった)

「外に出たいの。ねえ散歩できないかな？」

ルカが出て行った後、私はこっそりと2人に提案してみた。

ツイネさんは苦笑して、シルアさんにはっこりとほほ笑んだ。随分と対極的な反応だな。

「アイ様、ルカ様方が許可なさらないと難しいかと」

「いいえ、ツイネ。私たちの主人はアイ様なんだから望むなら叶えて差し上げないと」

「……シルア。少しは表情を隠したら？何か企んでるのバレバレだよ」

ひそひそと2人が話し始める。

シルアさん……ルカがいなくなったら本音が出たとか？

「えっと……」

異世界トリップ戸惑ったけど、こっちの方が戸惑う。

環境が変わるよりも身近な人のとんでも暴露の方が衝撃でかいよ。

シルアさんは、いつも素敵笑顔で癒しだったのに……。

今の笑顔は、ニルカと引けを取らないような気がするよ……。

「さ、アイ様。散歩に行きましょう」
「ひっ」

幽霊は大丈夫だけど、この笑顔は無理！

思わず奥へと逃げるけど、なんでだろう。水がいつもより冷たく感じる……？

「アイ様」

「し、しるあさん？」

「やはり私はアイ様に仕えることができ幸せでございます」

にっこりとほほ笑むとさらにもう一言言った。

「ニルカ様の嫌そうな顔見れるし最高の職場ですわ」

……。

うん、聞かなかったことにしよう。

ツイネさんは額に手をあててやってしまった、という表情をしている。

この世界の人って本当に腹黒が多い。一体何考えてるんだかわからない。

あれか。これが外国人から見た日本人ってやつなのか。

固まった思考でいらないうちを考えると、知らないうちにおなじみの金魚鉢が登場し、その中に入れられた。

散歩がしたかったからこれは望んでいたこと。

でも、こんな状況を望んでいたわけじゃない。

振り向くと、カートもどきを押す綺麗な女性たち。

やたら機嫌のいいシルアさんと眉間にしわが寄りっぱなしのツイネ

さん。

鼻歌が聞こえてきそうなのと、ため息が聞こえてきそうな二人。

(どうしたものかな)

いつもお世話になってるし、話くらいなら聞いてあげられるかな。考えていると、ふとあることに気がついた。

この道ってルカの執務室に繋がる道じゃ……？

「ねえ、なんでこの道を進んでるの？」

「……」

「え、何その笑顔。怖いんだけど」

シルアさんは、何を想像したのかふふふ、と口に手を当てて笑いをこらえている。

あー、窓から見える空が青いな。

こんな日には海に行きたいなー。

「着きましたよ、アイ様」

現実逃避していた私にシルアさんがとどめを刺した。

散歩の目的は、城内探索であってルカに会うためじゃなかったんだけどな。

それに、最初外に出たと言って言ったのに……。

気のせいかな、私とツイネさんのため息が重なった気がした。

第二章 苦勞とため息（前書き）

大変お待たせしました。

第二章 苦勞とため息

「失礼いたします」

シルアさんは返事を待たずに扉を開けた。

え？それはいいの？だめなんじゃないの？という突っ込みをする前にシルアさんは素早く行動した。

「あれ？アイだ。突然どうしたの？」

「アイ様がルカ殿下に御会いしたいとこのことで、お連れさせていただきました」

「え？」

いやいやいや。

そんなこと一言も言ってないけど！！

シルアさんは真面目な顔で言ってるけど、全然内容あってませんか
ら！！

ツイネさんを見ると、この光景から視線を逸らしている。

「アイが？嬉しいな。俺もアイに会いたかったところだよ」

「っ！！」

さらりと殺し言葉を吐きましたよ、この人！！
しかも嬉しそうな笑顔つきで。

壁沿いにある本だなの傍にいたニルカはいやそうな顔をしている。
ちらりとシルアさんを見ると、満足そうな笑顔。

「ツイネさん、助けて……」

「誠に申し訳ございません。私にはできません」

ルカは、シルアさんの言葉が本当だと信じてるのか嬉しそうににこしている。

周りに花を浮かべている場合じゃないから。

「ルカ殿下は今執務中だ。後にしてもらえないか？」

「私の主はアイ様でございますので、ご指示に沿いかねます」

ルカの周りはぼわぼわしているのに、シルアさんとニルカの周りは猛吹雪。睨みあうその間にはバチバチと電撃が飛び交っているように感じる。

一つの部屋でなんでこんなに空気が変わるんだか。

私は平和主義なんだから、勘弁してよ。

「アイ、お茶飲む？」

「ルカ……」

よくこんな場面でお茶なんて言ってもらえるよね……。

いつもは突っ込みを入れてるけど、今はその能力が欲しいよ。

私がどうしようかと考えていると、言葉ではなく視線で戦いを繰り広げていた二人はふっと一息つくくと部屋を出て行った。

「え、突然どうしたの」

「アイ様」

ツィネさんは、目で訴えてきた。

知らない方がいいこともあるんです。

……うん、そうだよな。

扉を遠い目で見つめると、ルカは不思議そうな顔をして聞いてきた

「あの二人って時々ああやって一緒に出て行くんだけど、もしかして付き合っていたりするのかな？アイはどう思う？」

「はぁ……」

ツイネさんとため息が重なった。

ツイネさん、苦勞してるんだ。

勞わるように見ると、ツイネさんの目が潤んだ。

それだけで普段の苦勞が垣間見ることができた気がした。

「どうしたの？目にゴミでも入ったの？」

そこにのんきな声。

「ルカ、一言言わせてもらってもいい？」

「なに？」

「空気を讀むことを覚えて！！」

金魚鉢の中から出ることはできないから殴らないけど、自由に歩けるときだったら平手じゃなくて拳で殴るよ。

平和主義だから、平和を乱すものには鉄槌を下さなくちゃ。

頭を捻っているルカを見て、やはり殴られるという刺激が必要だと認識した。

第二章 苦勞とため息（後書き）

ニルカとシルアは仲が悪いです。

似たもの同士なんです。他人がそのことを言ったら精神的に追い詰められるためタブーになってます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4902/>

私と人魚と王子様

2010年10月13日08時28分発行